

発行所 日本キリスト教団 なか伝道所
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 305
Tel. (045) 671-1109
振替 00200 - 1 - 47369
E-Mail : naka@church.jp http://church.jp/naka/
発行者 渡辺英俊 (題字 松橋 順)

宣教方針

- ① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
- ② 地域の問題に関わる。
- ③ 諸教会に呼びかけてゆく。

集会 主日礼拝 日曜日 午前10時30分より

だれのそばで聖書を読むか

寿から教会を考える ①

発題 渡辺英俊



寿は高齢者・障がい者の目立つ街になった

ト・チルドレンやスラムの住民に出会うことなどあり得ないでしょう。人間の想像力は、じつさいに見聞きしたことから先へ行くには限界があります。だから、聖書といえども、紙の上の黒いシミから得られる情報には限界があり、そこで語られてい

る事柄を理解するのにも限界があります。このことを認識せずに、別の紙の上のシミ(注解書)の情報で聖書解釈ができると思い込んできたことに、大きな誤りがあったのだと思います。

では、聖書への感性が開かれる場所とはどういうところでしょうか。たとえば、イエスがやろうとしたこと、語ろうとしたことを理解するには、できるだけイエスが生きた状況に近い場所に身を置いてみる必要があります。何十冊の注解書を読むよりも、たった一年、否、一ヶ月でもいい、現場に身を置いてみるの方が大事なのではないか……。信仰の理解(それが「神学」ということ)には、フィールドワークが欠かせないのではないかと……。というのが、あれから四半世紀、現場の問題に触れながら聖書を読み続けてきた者として、現代の教会に問いかけたことなのです。

イエスの「場」

では、イエスはどういう場に生きたのでしょうか。

イエスについての情報は主として福音書から得られます。しかし、四つの福音書はいずれも、それを生み出した著者(とその教会)の置かれた「場」の力で変形されています。その前に、イエスについての情報が口伝にされた口伝の段階でも、口伝を選択したり色づけしたりした伝承者(集団)の置かれた「場」の力で変形されています。こういう変形をできるだけ取り除いて、イ

「原発大震災後」といつ、新しい「戦後」と言ってもいいような厳しい時代を前にして、教会はそれにどう立ち向かおうとしているのだろうか。

戦後の教会指導者たちのように、あの戦争の時はあれでしようがなかったんだ、という弁解を繰り返さないために、教会は「帯を締め沓をはけ」と、神から呼びかけられているのではないだろうか。

なか伝道所の約四半世紀の歩みから教会のあり方を見直す、作業の出発点として、渡辺牧師の発題で聖書の読み方について考えた。

頭は尻の上に？

もう四半世紀前になってしまいました。なか伝道所を始める前の一年、私がフィリピンに滞在して、一年がかりで開いてきた「悟り」が

「頭は尻の上にある」というものでした。人は身を置く場所によつて感性が開かれたり閉ざされたりするということです。

聖書への感性が開ざされる場所の典型が、「住宅地」の「中産階級」の生活環境でしょう。ここでは、住宅地の自宅と、オフィス街の職場と、住宅街またはオフィスの教会を結ぶ線の上を往復するだけです。たぶんそこでは、野宿者を見かけることはないでしょうし、ましてやストリー

ト・チルドレンやスラムの住民に出会うことなどあり得ないでしょう。人間の想像力は、じつさいに見聞きしたことから先へ行くには限界があります。だから、聖書といえども、紙の上の黒いシミから得られる情報には限界があり、そこで語られてい

る事柄を理解するのにも限界があります。このことを認識せずに、別の紙の上のシミ(注解書)の情報で聖書解釈ができると思い込んできたことに、大きな誤りがあったのだと思います。

では、聖書への感性が開かれる場所とはどういうところでしょうか。たとえば、イエスがやろうとしたこと、語ろうとしたことを理解するには、できるだけイエスが生きた状況に近い場所に身を置いてみる必要があります。何十冊の注解書を読むよりも、たった一年、否、一ヶ月でもいい、現場に身を置いてみるの方が大事なのではないか……。信仰の理解(それが「神学」ということ)には、フィールドワークが欠かせないのではないかと……。というのが、あれから四半世紀、現場の問題に触れながら聖書を読み続けてきた者として、現代の教会に問いかけたことなのです。

イエスの「場」

では、イエスはどういう場に生きたのでしょうか。

イエスについての情報は主として福音書から得られます。しかし、四つの福音書はいずれも、それを生み出した著者(とその教会)の置かれた「場」の力で変形されています。その前に、イエスについての情報が口伝にされた口伝の段階でも、口伝を選択したり色づけしたりした伝承者(集団)の置かれた「場」の力で変形されています。こういう変形をできるだけ取り除いて、イ

エスの周辺まで遡れる伝承の原形をみると、そこに共通の生活感覚や生活環境が反映していることがわかります。

その代表的な例を挙げてみましょう。

①「失われた羊」のたとえ

(ルカ一五・四≒マタイ一八・一二)

マタイ・ルカの共通資料(○資料)に出てくるもので、伝承や福音書著者の付け加えを取り除いてみると、原形は

「ある人に百匹の羊がいて、その一匹を失ったならば、九十九匹を荒野に放置して、失ったものを見つけるまでそのもとへ行かないだろうか。」

という短い形です。失われた「1」が「99」より大きくなってしまふ、「100」という衝撃的な逆説を語ったものですが、この背景になっているのは、当時の被差別者だった「羊飼いの生活です。一匹でも失って弁償させられたら生活が立たない。一匹に生活のかかった羊飼いの生活感覚から語り出された話です。

②「種蒔く人」のたとえ

(マルコ四・三一八)

蒔いた種が、道ばたや石地や茨の中に落ちて実を結ばなくても、善い地に落ちた種が百倍もの実を結んで報いられる話です。

後でマルコが、これに寓意的な解説を付け加えています(四・二〇—二一〇)、これをわきにおいて考えれば、たとえの本体は教会的な色づけがなく、よく保存されています。ここには、道ばたや石地や茨の中に種が落ちてしまうような、沃地のはずれの瘦

せた狭い土地や傾斜地に種を蒔いて、生活せざるを得ない、貧しい農民の暮らしが色濃く影を落としています。

③「荒野の供食」の物語

(マルコ六・三八—四四)

荒野でイエスが群衆にパンを分ける話ですが、古くから教会の聖餐式の起源物語として語り伝えられたものと見られます。「天を仰いで讚美の祈りを唱え、パンを裂いて……」という聖餐式の所作を織り込んで、奇跡物語に仕立て上げられています。パンの余りが「十二の籠にいっぱいになった」という「十二」は、教会を表すシンボル・ナンバーですし、「男だけで五千人」という、女性や子どもを無視した文言も、奇跡性を強調するために伝承の段階でつけ加えられた脚色でしょう。そういう脚色要素を取り除いてみると、飢えた民衆がいて、イエスの仲間たちが食べ物を集めてきて、みんな

で食べる……という話になります。これは、「炊き出し」の話だとわかります。イエスの活動は、飢えをかかえた貧しい人びとの中で、食べ物を探し出し、見つけたものを分け合っついでいっしょに食べる運動だったことを映し出す伝承です。

これらの例から分かるように、「栄光の復活者キリスト」という教会の粉飾を除いてみると、イエスは、貧しく、飢え、差別を受けていた人びとの場で活動されたことを指し示す情報が残っているのです。

現代の世界で

イエスの「場」に最も近いことが、日常的に、しかも大規模に起こっているのが第三世界です。私はフィリピンとブラジルをほんの少し覗いただけですが、それでも目を剥くほどよくわかります。

国際資本の支配下で、これと組んで輸出用作物の大規模農場を経営しようとする地主が、農民を追い出しにかかります。これに対して、土地を守るために農民が闘い、それを支援する牧師や弁護士が、暗殺されています。イエスの十字架は、昔話ではないのです。こういう、農民や労働者の闘いの場面は、イエスのおられた状況をよく理解させてくれます。同じではないが、状況の構造がよく似ている……、つまり類比が成り立っていて、容易に想像で飛び越えられる距離まで行けるのです。

被差別、被抑圧、被搾取という、社会の仕組みが造り出す不利な立場、社会的ハンディを負わされた人びとの生きる場が、イエスの活動の場だったのです。

現代の日本でも、寄せ場住民や民族的マイノリティや障がい者、性的マイノリティの置かれた状況は、第三世界とのつながりを見失いさえしなければ、いちばん近い類比を示してくれると思います。そこが、聖書を理解するのに最も有利な場場ということです。なか伝道所は、そこから日本の、否、世界の教会のあり方を問い直すところとしてい

風景

小学6年の時、友だちに誘われて日曜学校に通ったのが教会との出会いでした。父の仕事の都合で各地を転々としていたため、教会も変わり、人との出会いもたくさんありました。看護師を志すようになったのも、教会の講演で岩村昇氏に会ったからです。「私もネパールへ行って井戸とトイレを掘ろう。」と思いました。ネパールへは行けませんでしたが、縁あって寿町で仕事をするようになりました。

当初は、受け持った患者さんに対して「この人たちは自分の好き勝手をして身体を悪くしたのに、なぜこんなに医療を受けられるのだろう」と思っていました。

すると、自分がしている仕事の意味が分からなくなり、悩み、そんなふうに考える自分が嫌になり、神様に祈ることが問うことが多くなりました。小さい頃から、祈るときは遠い天にいらつしやる神様を見上げていました。すがすがしい、すぐ隣にいて私の働き方を見て下さるのを感じました。それから、理屈でなく、その人が辛く苦しいこと、困っていることを取り除く手伝いをする、ただそれだけのことで納得できました。

エイシユンさんや三森さんに出会い、貧困や差別に苦しむ人たちに寄り添う姿を見て、私も連なりたくて強く思いました。小学6年生から今まで、求道の期間は長い道のりでしたが、この場所が用意されていたのだと感謝し、神様の手となり足となり、御心が行えますようにと祈ります。

沓澤則子(二〇一一年四月二四日受洗)

使信

自由という危険

渡辺英俊

主なる神は人を連れて行ってエデンの園に置き、これを耕させ、これを守らせられた。主なる神はその人に命じて言われた。

「園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし、善悪を知る木からは、取って食べてはならない。それを取って食べると、きつと死ぬであろう。」

(創世記二章一五〜一七節 協会口語訳)

自由というミステリー

人間のもつとも人間らしいところ……、そして神に似せて造られたところ……、というのは、愛することができるということなんです。愛で結ばれ、造られた世界でいっしょに働き、いっしょに遊ぶパートナーとして、神は人間をお造りになったわけですから。

ただ、愛が愛であるためには、自由がなくてはならない……。力ずくでムリやり言うことをきかせる……という間柄では、愛は成り立ちませんからね。お互いに、何の強制も脅しもない場面で、いっ

「園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。」

どの木からでも心のままに……と言うんですから、完全に自由ですよ。ところが、これだけだと、かえって自由じゃない。というのは、ハラがへつたら食べる、とりあえず手近なところから……ということになる。胃袋の空き具合に支配されて、自分で決めるところは何もなくなる。ちつとも自由じゃない……。

そこで神は続けてこう言った……と。「しかし、善悪を知る木からは取って食べてはならない。」

リクツで言うとはずかしいようなんですけど。創世記の神話はたった三行で、この自由の含むミステリーを、この上なくわかりやすく描いているんですよ。神は人間を造って「エデンの園」に住ませ、たくさん木や草の実を食べて、何不自由なく暮らせるようにした上で、こう言った……と。

一本だけ、食べてはいけない……というんです。何万本もある中で、たった一本だけ……。でも、食べるなど言いながら、バリケードで囲ってあるわけじゃない……。手を伸ばせばいつでも取れる場所にある……。これって、意地悪みたいなんです。この木の前で何が起ころるかという……。

えーとねえ

花 「お父さんの会社って、すべりだいあるの？」

お父さん 「えっ？ すべりだい？ ないよ。」

花 「じゃあ、フランクは？」

お父さん 「？？？」

(保育園のような会社を想像している 幸前花 5才)

この木は園の中央に植えられていたんで(九節)、いやでも目につくんでしよう。人間がその前に立つて、食べようと思えば食べられるんだが、さて食べようか食べまいかと考える……。こうして人間は、自分の自由を自覚するわけでしょう？ その上で、この豊かな園をくれた神が食べるなど言った……。その通りにするかしないかの選択をする。自由をどちらに使うか……。神の愛に愛で応えて、言われるとおり食べずにおこうと決めたら、そのとき、神と人間との愛のつながりが成り立つわけですね。

この神話は、そういう自由というもののミステリーを、素朴な物語で見事に語っていると思うんですよ。

「善悪を知る木」

このとき、神は

「これを食べたなら、きつと死ぬ。」

と警告してるんですけれど。もし、毒があつてほんとうに死ぬというんだつたら、自由な選択じゃなくて、もともと食べられないということなんじゃない？ 実は物語の後の方で、人間は神の言いつけに背いて食べちゃうんですけど、死なない……。神は脅すためにウソを言ったのか、ということになるんですけど。そう

じゃなくて、神の願いに背いて食べるな

と言われた実を食べたら、神との信頼関係を破ってしまう……。自分を造り、愛してくれている相手とのつながりを切ってしまったときに失うのは、生物的な命とは違う、「つながり」という命なんですね。滅亡に至る暴走がそこから始まる……。神はそれを警告してるんですね。

そのことは、「善悪を知る木」というシンボルに秘められた意味でもあるんですね。善悪をわきまえて何が悪いのか……と言いたくなるところですけど。ヘブライ語の「知る」は単なる知識の問題じゃない、もっと深い意味がありましてね。男女が性的な関係を持つことを「知る」と言うくらいなんです。善悪に関する「知る」と言えば、「決める」とい

う意味になる……。もともと「善悪」というのは、ほかの人とのつながりの中で、相手に善いことが「善」で、その反対が「悪」で……。この物語の場面では、相手は神ですから、神の喜ばれることが善であるはずなんですすけど。人間はそれを、相手を抜きにして自分だけで決めてしまいたいと願う……。それはしないでほしい、つながりを大事にしてほしい……と、神は願われるんですけど、人間は神の願いを振り払うように、「善悪を知る木」の実を食べてしまってますね。

自由は、人間との間に人格同士の愛のつながりを持つこととして、神が人間に与

まど

▽三月二七日、礼拝で伝道所のメンバーから、東松島市の被災地に住む親戚を見舞ってきた報告。声も出なかつたと涙ながらに。その親戚の方が校長をしている中学が避難所になっているとのこと、ただちに伝道所で救

援物資を集めて送ることに。
▽同じ礼拝で出席者からの情報。横浜市の県立武道館が、福島からの原発被災者の一時避難所に提供されているが、救援ボランティアの受け入れがうまく行っていない。翌二八日、県の人権担当部に電話を入れ、担当窓口と話をつないでもらう。お陰で災害ボランティア・コーディネーター

と連絡がとれ、炊き出しを受け付けてもらえるめどが立ち。寿炊き出しの会と連絡、毎週金曜の炊き出しから必要な人数分を運んでもらう手配。四月一日、第一回の炊き出しに参加。炊きたての雑炊を、魔法瓶式のズンドウに入れて車で三〇分、アツアツの雑炊が被災者に喜んでもらえて。野宿者にスूपを運ぶための装備が災害時に威力を発揮。ボランティアは、日常の継続が力であることを実感。

▽四月二四日イースター礼拝。今年は二人の受洗者が与えられ、しかも二人とも寿でのワーカー。神の見えざる手が働いていることに感謝。(渡辺英俊)

えられたものなんですすけど。この自由は、神に従わないという危険な選択肢があつて成り立つもので……。その上で神の愛に応えるという選択が行われて愛のつながりができる……。そのために神は、人間というご自分の思い通りにならないやつかいな存在を造られたんですね。でも、そういう相手として造られているところに、危険と背中合わせの、人間の尊厳があるんですね。

創世記の神話は、その後、人間が選択を間違えた物語に続いていくんですけど。これは昔の話じゃなくて、今も人間が犯し続けている誤りを、素朴な神話の形で物語っていると思うんですよ。

「核エネルギー」という選択は、ちょうど「善悪を知る木」に似ていて……。無尽蔵のエネルギーが手に入つて、電気が使え放題になる……というバラ色の夢のラップをかけて、死の毒を人間に選ばせた……。それを察知して、いち早く警鐘を鳴らす人びとを、神は備えていてくださったのに……。目前にある莫大な利益をほしかった資本と、カネで買われた政治家・官僚・学者たちがグルになつて「国民」をだまして……。地震列島の上に五四基も原発を建て並べるといふ選択をしてしまったんですね。それが今、敗戦以来の大きな犠牲を「国民」に強い

ようとしているんじゃないでしょうか。「それを食べるるときつと死ぬ」という警告を思い起こして、もう一度出発点に立ち返って選択をし直す必要がある……。創世記の神話は、今、それを語りかけていると思うんですよ。

なか伝道所支援 献金のお願い

皆様のご支援により、伝道所の活動は大きな支えをいただいています。心より感謝し、下記のとおりご報告いたします。

今年も今まで同様、皆様のお祈りと支援献金へのご協力をお願いいたします。

支援献金 (三月分)

支援献金 (四月分)

感謝してご報告いたします。